

ポスト 9/11 のフラヌール

Teju Cole の *Open City* における記憶とパリンプセスト

桑原拓也

1. イントロダクション

本稿は、Teju Cole によって書かれた *Open City* における文学理論的な側面を明らかにし、理論が作品読解と如何に交錯するのかということ問うものである。*Open City* が批評的に注目される理由として、その独特な語り構造が挙げられる。本作品は語り手の男性 Julius が主にニューヨークを歩き、多種多様なエピソードや彼自身の記憶について断片的に語っていく小説である。この点から、本作はしばしば「フラヌール小説」の系譜にあるといわれる。

本作品の批評のテーマは、主に「コスモポリタニズム」と「ポストコロニアリズム」の二つに区分される。まず本作品において、コスモポリタニズムはその失敗という観点から論じられる。本作品は、一見するとコスモポリタニズム的な共同意識に基づいた世界像を構築しているようでありながら、その内部においてコスモポリタニズムの統一性を破壊するような差異に基づいている。つまり、コスモポリタニズム的な統一性というよりも、その思想を解体していくような差異が表現されているといえる。本作品でコスモポリタニズムの例として、Kwame Anthony Appiah によって書かれた *Cosmopolitanism: Ethics in a World of Strangers* が直接言及される。しかし、すでに影響元が言及されているにもかかわらず、コスモポリタニズムについて論じることは単なる注釈になってしまう危険性を孕んでいる。ⁱ また、ポストコロニアリズムも黒人性やアメリカの植民地時代の記憶といった観点から論じられる。

さらに、上記の論点に理論の受容を付け加えることができるだろう。Nicholas Dames は書評の中で、Teju Cole は高等教育で文学理論を学び作品で実践する“Theory Generation”の作家の一人だと述べている。実際に、作中では Roland Barthes や Paul de Man をはじめとした文学理論に影響を与えた人物のみならず、哲学者やカルチュラル・スタディーズの研究者の名前も言及される。こうした理論の受容と実践は、移民小説において新たな表現形式の獲得に寄与するのではないだろうか。移民文学はしばしば移民に伴う苦悩や葛藤の経験にのみ焦点を当てられるが、その点を重視するあまりテキストにおける理論的な発展を見落とす可能性もある。Teju Cole の作品は、移民経験と文学理論が混在した小説だと指摘できるだろう。

本稿は、*Open City* における理論的側面を下敷きに、パリンプセストという作品読解の鍵になる単語に焦点を当てる。そして、語り手 Julius に内在する暴力性を読み解いていく。

2. 記憶、パリンプセスト、暴力

記憶と歴史のエピソードが断片的に配置された本作品において、都市の歴史性に着目したパリンプセストという単語は重要なキーワードになる。ある時、Julius はグラウンド・ゼロの周辺を歩きながら、“The site was a palimpsest, as was all the city, written, erased, rewritten” (59) と述べる。つまり、Julius は都市空間を羊皮紙のように書かれては消される場だと捉えている。ⁱⁱ しかし、パリンプセストが消去と記入を繰り返すなら、現在形では常に表層だけが示されることになる。その場合、パリンプセストにおいて痕跡として刻まれた消去の記憶は、一見すると不可視のものになってしまう。その際に、Julius の都市をめぐる語りは不可視の痕跡を暴露するという点で、都市の歴史と記憶を再構築するための重要な語りになる。

しかし、Julius は作品の終盤で、ナイジェリア時代の友人の姉 Moji に対するレイプを本人に告白される形で想起させられる。パリンプセストにおける過去の痕跡を読み取る語り手 Julius は、自身の深層には無自覚だったということが提示される。彼の忘却が意識的なものだったのか無意識的だったのか定かではないが、少なくとも Moji が指摘するまで Julius は暴行の事実は無自覚なままである。

3. 信頼できない語り手と “Theory Generation”

Open City が Julius という一人の語り手によって語られる作品だということを踏まえると、詳細に作品を読むと不自然な点が散見される。Julius が恣意的に語りの順番を入れ替えていることが浮かび上がるのだ。21 の断片から構成される本作品において、終盤の 20 章で Moji に対する暴力が語られる。しかし、その直前に Julius は自身を擁護するかのよう、“We have the ability to do both good and evil” (243) といった弁解じみた言葉を並べる。また Moji の告白後も Julius は沈黙を保つことで、暴行の事実の有無を解釈の問題に委ねる。ⁱⁱⁱ このよ

うな語りの操作によって、読者は Julius が信頼できない語り手である可能性に気づくことになる。

しかし問題は、作者の Teju Cole が “Theory Generation” だとすでに指摘されていることにある。大きな起伏のない本作品の語りにおいて、Moji に対する暴行はクライマックスに等しい衝撃を持つ。その衝撃によって、読者は Julius の語りの根源にこの暴力の記憶が位置すると読み解きたくなる衝動に駆られる。とはいえ、暴力の記憶をマスターコードだと考え理論的に解釈することは、小説に組み込まれた理論に誘導される危険と隣り合わせになる。例えば、コスモポリタニズムの失敗という批評的な枠組みは、この暴力性と容易に結びつくのである。

4. 読むことの暴力、語ることの暴力

Open City が理論を前提に書かれていることに疑念の余地はないだろう。Teju Cole はおそらくポストコロニアルやコスモポリタニズムという語彙を用いて、作品が語られることも十分に予期していると推測できる。しかしその時、批評はいかにして作品に応答できるのか。また、いかにして作品における理論と関係していくのだろうか。このとき、批評は作品を一方向的に解釈するのではなく、作品に内在する理論や著作の内容を考慮に入れたうえで読み解いていく必要があるだろう。

ここでは例として徴候的読解^{iv} と Julius の関係を挙げる。精神科医として研修に従事する Julius は人間の心理を読み取るように、都市の痕跡を読み取り解釈する。こうした読みを行う Julius は、紛れもなく批評的な目線を持っている。そして、精神科医であることも相まって、彼は徴候的な読解を都市に対して行うのだ。しかし、彼は自身に内在する過去の暴力の記憶に無自覚なままである。むしろ、語りの順番を入れ替え、暴行の有無すらも解釈に委ねる Julius の態度は、彼自身による語りの暴力でもあるといえる。

Julius の矛盾した態度は、批評家が作品を読むときの態度にも通底する。批評家は作品を読む際に、時として意図せざる解釈を行う場合がある。Paul de Man による批評の洞察と盲目をめぐる複雑な関係性のように、批評テキストがいかに十全を期したとしても、作品の解釈には常に矛盾と操作が存在する。Julius と彼自身の語りの矛盾に満ちた関係性は、批評行為がテキストに加える暴力を改めて私たちに提示する。その意味で、*Open City* は記憶と歴史を主題としながらも、同時に理論小説の実践でもあるといえるだろう。

ⁱ Werner Sollors は Appiah によるコスモポリタニズムと一般的に言及されるコスモポリタニズムの差異を明らかにしたうえで、*Open City* において Appiah のコスモポリタニズム概念が参照される必要性を論じている。この点で、Sollors の研究は単なる注釈にとどまることを回避している。

ⁱⁱ パリンプセストという語において、消去は完全な消去ではない。消去は常に痕跡を残しながら行われるため、ある時点で不可視であったとしてもその痕跡は存在する。

ⁱⁱⁱ Pieter Vermeulen は “The story, in other words, converts the spectacle of traumatic suffering into an assertion of the heroism of inexpressiveness.” (53) だと論じている。

^{iv} 徴候的読解 (symptomatic reading) は Fredric Jameson によってアメリカで普及した読解であるが、近年は Stephen Best と Sharon Marcus によって発案された “surface reading” などの読解をめぐる新たな動きの中で改めて注目を集めている。

引用文献

Anthony Appiah, Kwame. *Cosmopolitanism: Ethics in a World of Strangers*. Penguin, 2007.

Best, Stephen and Sharon Marcus. “Surface Reading: An Introduction.” *Representations*, vol. 108, no. 1, 2009, pp. 1-21.

Cole, Teju. *Open City*. Random House, 2011.

Dames, Nicholas. “On the Theory Generation.” *n+1*, no. 14, summer, 2012, pp. 157-169.

Sollors, Werner. “Cosmopolitan Curiosity in an Open City: Notes on Reading Teju Cole by way of Kwame Anthony Appiah.” *New Literary History*, vol. 49, no. 2, 2018, pp. 227-248.

Vermeulen, Pieter. “Flights of Memory: Teju Cole’s *Open City* and the Limits of Aesthetic Cosmopolitanism.” *Journal of Modern Literature*, vol. 37, no. 1, 2013, pp. 40-57.